

社会科の授業を対人援助学の視点から⑫

2026年2月 内田一樹

0. はじめに

今回は2025年度の高校選択講座「東北と復興」の11月福島県浜通りスタディツアーでの内容と生徒たちの学びの様子を振り返りたい。

1. 2025年度の福島県浜通りスタディツアー

(1) 今年度の浜通りスタディツアーの目的

戦後80年という節目の年であることから、戦後80年の歴史と福島第一原子力発電所事故がどのようにつながっているのかについて考えることを目的におこなった。

第二次世界大戦の終戦は広島・長崎の原子力爆弾という核兵器の投下で終わる。戦後冷戦の中でアメリカのアイゼンハワー大統領の「核の平和利用」演説により、原子力発電所への道（民間の核利用）への道が開かれる。とりわけ被爆国日本に原子力発電所ができることは、アメリカの原子力ビジネスの観点からも求められていた。戦後復興のエネルギー需要の高まりから、日本においても原子力発電の研究が進み、ついに福島第一原子力発電所がつくられる。その後も全国につくられて行く原子力発電所は、高度経済成長期とその後の日本の経済を支えるエネルギー源であった。

原子力発電の歴史についても学ぶため、今回の福島県浜通りスタディツアーにおいては、まず茨城県東海村から始めることとした。そして福島県に移動し、福島第一原子力発電所事故をめぐる行政の言葉、企業という言葉、科学者の言葉、住民の言葉を広く聴き、改めて福島第一原子力発電所事故の本質をみんなで考えることを目的とした。

(2) 事前学習、スタディツアー、事後学習の流れ

10月4日；市村高志さん講演/映画「生きて、生きて、生きる」上映鑑賞

10月14日；「核」の技術の歴史

10月21日；長崎スタディツアー報告会

11月4日；水俣スタディツアー報告会

11月11日；第五福竜丸事件と核の平和利用

11月14日；第五福竜丸展示館・アーティゾン美術館（校外学習）

11月18日；近代における「科学」と「技術」とは何かを考える。

11月23日から11月26日；福島県浜通りスタディツアー

12月2日；浜通りスタディツアー感想交流会

12月9日；「復興」とは何か考える①

12月16日；「復興」とは何か考える②

事前学習①市村高志さん講演/映画「生きて、生きて、生きる」上映鑑賞

この日は7月に実施した宮城県石巻市スタディツアー報告会を10時から行い、その後市村高志さん講演、昼食をはさんで午後に映画の自主上映会、鑑賞を行った。講座受講生徒以外にも講座受講生以外の生徒や受講生の保護者などが参加した。

市村高志さんには学園にお越しいただいて「原発避難当事者の視点から東日本大震災を振り返る」と題して講演していただいた。震災当時、福島県双葉郡富岡町に住まれており避難当事者である。共著として『被災者発の復興論』や『人間なき復興』などがある。

市村さんからは富岡町のこと、震災時どのようなことが起こったのか、広域避難がどのように行われたのか、そして現在「復興」の中でどのようなことが避難当事者たちに起こっているのかについて、当時の写真なども用いながら講演していただいた。避難をめぐる本質的な課題についても講演いただき、生徒たちにとっては福島第一原子力発電所事故がもたらした避難と帰還をめぐる行政の政策と、当事者のみの選択として迫る意思決定について考えるところからのスタートとなった。

以下は参加した生徒の感想からの抜粋である。

・自分自身、「福島」というものについて、知らないことが多くあるということを実感した。また、福島に行ったことがないからこそ、分かったこと、分からなかったことがあるとも感じた。どちらにせよ、後期福島スタディツアーへの気持ちがより一層深まっていったように思う。市村さんの講演では実際に市村さんの実体験を基に、東日本大震災というものを振り返った。だからか、専門社会調査士である市村さんではなく、一人の富岡町の住民である市村さんのお話を受け止めるというような感覚でもあった。だけど、だからこそ、原発というものに対して「怒り」を持っているということを感じたし、それほど原発というものは、本当に、地域住民にとっては不条理なものだったのだということを感じた。今回初めて本質的な理解を少しできたような気がした。富岡町は震災後イノベーションコースト構想として、メガソーラー発電所事業が実施されているという話が市村さんからあったが、自分はどうしても、その政策が、過去の記憶の忘却というものも、また促進させる何かしらの危険性があるのではないかと感じてしまっている。

・ここまでくわしく話を聞いたことが良かったと思う。市村さんと母だけが外へ出てたと言っていて、自分がその状況の中にいたら、外に出ないほうが良いだろうとかの判断ができなかっただろうなと思った。

午後には映画「生きて、生きて、生きろ」の自主上映会を行い、鑑賞した。こちらは映画にも出演されている精神科医の蟻塚亮二医師、及び相馬広域こころのケアセンターなごみの米倉一磨さんから福島県浜通りスタディツアーの中で講演いただく予定であったため、上映した。合わせて2025年が戦後80年という節目の年であったこと、心のケアをテーマに今年度は学んでいることから上映会を行った。

以下生徒の感想の抜粋である。

・言葉にはできないが、何か「すごいものを観た」という感覚だけが強く残っている。映像に映る全ての風景や言葉が自分の知らないものすぎて、終始圧倒されてしまっていた。映画の中で、双葉町の姿だけが残って人がまったくない映像が流れてきた時、双葉町だけが、世界の時間に取りこぼされているような感覚に陥った。それなのに、国としては、「復興は進んでいる」という言葉を発した時にすごく違和感を覚えた。そんな映像を通して、「復興」というものとは一体何なのか、という問いが生まれた。「東北と復興」を受講していながらも、そんな問いは正直生まれたことがなかった。地域社会を元に戻すということは不可能かもしれないが、それでも災後地域の復興を考えていく上でどのようなアプローチが必要なのか、ということを考えて。今も考えているが。

・「なごみ」みたいな地域で助けを必要としている人をすくってあげられるような団体がいることで、ギリギリの所ですくわれているんだろうなと感じた。どこまで行政が受け持つべきだろう。

・みんな生きたくて生きているのか、死にたいのか、何故生きているのかなど生きていく上での「目的」や「目標」がある、支えがあるのか否かによって変わってくるように感じた。改めて優しい方だなと、映画内にいた人を見て思った。生きるって大変なのかも。

事前学習②他講座のスタディツアー報告会

本講座以外の別の選択講座で長崎スタディツアーと水俣スタディツアーが今年度実施されていた。そこでそれぞれのそれぞれから授業の中でスタディツアーの報告会をしてもらった。人類と核の利用の歴史という観点からも長崎のことを、戦後復興としての高度経済成長と公害という観点から水俣のことを事前学習の中で扱いたかったからである。その授業を授業者ではなく、実際にツアーとして訪れた講座受講生にしてもらうようにした。

事前学習③第五福竜丸展示館とアーティゾン美術館企画展「ジャム・セッション「山城千佳子×志賀理江子|漂着」鑑賞

第五福竜丸展示館では学芸員の市田真理さんに案内していただいた。アメリカの水爆実験のこと、1954年の第五福竜丸事件のことや、これをきっかけに改めて広島、長崎での原子力爆弾投下のことも合わせて日本で反核運動が始まったことや世界の反核運動の歴史について学ぶ機会となった。

その後アーティゾン美術館に移動してジャム・セッションを鑑賞した。沖縄についての山城千佳子の映像作品と、志賀理江子の石巻や福島についての作品群は、生徒たちに刺激を与えたようだった。行ったことがある場所についての作品から、読み解こうとしていくようだった。



福島県浜通りスタディツアー（11月23日から11月26日）

今回もスタディツアー前に、「スタディツアー前のわたし」というテーマで生徒たちには400字程度の文章を書いてもらった。ちょうど学園のイベントである公開教育研究会の時期とも重なり、休みなくスタディツアーに突入したため、みんなベストコンディションではない状態でもあった。

11月23日（日）

スタディツアーはさいたまスーパーアリーナでの集合から始まった。このさいたまスーパーアリーナは、東日本大震災当時、福島県双葉町を中心とした広域避難者を受け入れた場所である。このスーパーアリーナの近くから福島へ向けてバスで出発することに意味があると感じていた。

1日目の最初に訪れた場所は、茨城県東海村。東海原子力館テラパーク、東海原子力科学館である。東海原子力館テラパークは、日本原子力発電株式会社の施設であり、第二発電所の敷地内にある。原子力発電の歴史や原子力発電所の安全対策などを講義していただき、発電所も外から案内していただいた。丁寧な対応や説明であった。その後昼食を経て午後には東海原子力科学館を見学した。こちらは公益社団法人茨城原子力協議会が運営している博物館であり、別館には東海JCO臨界事故についての展示もあった。科学的な見地から分かりやすい展示が多く、基礎的なことから放射線や放射能、核分裂などの科学技術を知ることが出来る場所だった。

その後東海村を後にし、1日目の宿泊地福島県いわき市湯本温泉にある古滝屋旅館へ向かった。古滝屋旅館には夕方だったが、そこから1日目最後のプログラム、大熊未来塾の木村紀夫さんからの講演と古滝屋館主である里見さんに原子力災害考証館を案内してもらった。

テラパークではAIの発展で電力が10倍必要になるからこそ、原子力発電の再稼働などで電力を賄っていく必要があるという説明があったのに対して、木村さんからはAIの発展で電力が10倍必要になるということがどこまで人類が豊かになれば気がすむのか、という話があった。同じ現象に対して全く異なる意見であり、このことは生徒たちの間で深く考えさせたようだった。

以下、生徒の福島県浜通りスタディツアーの感想から1日目の内容についてのものを抜粋する。

・福島スタディツアーを終えて、自分は1日目の夜に古滝屋で木村さんが言っていた、贅沢の価値観について考え直すべき、というような言葉が印象に残っている。日常生活の中で大量に消費している電力に対して、無限に湧いてくるのだと、どこかで錯覚してしまっていた自分、生活で使用する電力を見直さなければならない。また、ありふれる情報、どんどん進歩していくAI、それに対して木村さんが言った「今の人間は家畜化されている」という言葉も強く印象に残っている。日常生活の中で必要な電力について「考える」ことをせず、便利に囚われ、無限に電力が湧いてくると錯覚している人があまりに多いのではないかと思う。自分もその一員である。AIの進歩によりこれから更に電力需要が大幅に高まる中で、火力発電に頼っている今の日本、これからも火力発電に頼りきりでCO2を排出し続けるのは、地球温暖化の問題も一刻を争う状況であるため、厳しい。かといって再エネで賄うというのは少し現実的ではない。福島スタディツアー中のバス移動の際にたびたび見かけた大量に見かけたソーラーパネル。日本各地で発生しているソーラーパネルの影響で起きている様々な問題、そしてパネルの廃棄によってCO2を排出してしまうという現実。その他の再エネも生み出せる電力が少なく、コストも高くなってしまふ、なかなか厳しい状況。そうなってくると運転中にCO2を排出することもなく、コストがとても良い、原子力発電に頼るしかないのでは、と感じる。しかし、その原子力発電は、六ヶ所村の再処理工場、最終処分地の問題、そしてテロの標的になる危険性、など様々な問題を抱えている。六ヶ所村の再処理工場については、27回ほどの延期が行われ、現在も完成の兆しは見えず、総事業費も増大している。そんな破綻しかけ、破綻している、日本政府が掲げる、核燃料サイクル。また、中間貯蔵施設のプールも日本各地で埋まってきてしまっていて、あと数年しか持たないというような状況であるという問題も抱えている。そうして中間貯蔵施設が埋まったら、声を上げることができない立場の地域に核のゴミを押し付け、最終処分地とし、そこに住んでいる人々に、自分は知らないうちに搾取をしてしまっていることになるかもしれないリスクもある。原発の稼働に賛成することは、その搾取を容認することになってしまう恐ろしさがある。

福島スタディツアーのバス移動中に、海外の原子力発電の政策を調べていく中で、フィンランドの核のゴミの最終処分地に対する政策にとっても驚いた。地盤が硬い場所の地中400メートルに、核のゴミを埋めてしまうという大胆な政策。また、原子力発電によって栄えた、発展した地域にその最終処分地をつくるようになった時に、その地域に住む住民の方々は反発せず、原子力発電で栄えた、発展した、安定した暮らしが出来たから、自分たちはその施設を受け入れる、という姿勢をとったということを知り、声を上げられず搾取されていないことに安心した。それを知り、これなら核燃料サイクルなどという破綻した、実現できない政策などやらずに、済むのではないかと考えた。日本政府も核燃料サイクルという夢をいつまでも引きずってないで、大胆な政策に切り替えなければならないと感じた。

木村さんが言っていた、家畜化された人間、これが進歩しすぎた、発達しすぎた人類の現状であると感じる。行き過ぎた社会の発展、科学技術の発展による便利すぎる生活、発達しすぎたAI、自分はその発展が人類を幸福にしているようにあまり感じない、人と人の繋がりが薄く、弱くなってしまったことによる、孤独感を強く感じる人も増えている。

「便利」に囚われた生活、少しづつ歪んでいっている「贅沢」の価値観、浴びるように使っている電力と、たくさんの資源、加速する地球温暖化、声を上げられない生き物を殺していく、こんな悲惨な現実を受け止めなければならないと責任を感じた。理想論ではあるが、生活水準を世界全体で少しずつ下げていって、エネルギー消費量を減らしていって、再エネと蓄電技術だけで世界が回るようになって、原子力発電や火力発電などをしなくても良くなったらいいと思った。





・事前学習として訪れた第五福竜丸展示会で学芸員さんが語っていた「第五福竜丸事件や「ビキニ環礁水爆実験」という呼び名によって、ほかの事象が抽象化されてしまっている。という言葉聞き私は出来事に対して名前を付けることによって、理解し共有しようとするしかしそれと同時にその名の枠に入らない人々を視界の外に追いやる力を持つ。一つの固有名詞が持つ代表性それらの言葉は理解を助ける一方で理解したという自分の中で錯覚を生んでしまう。しかし実際は被爆の影響やそこに住んでいる人々のあたりまえの生活が変わってしまい、それらの影響は今なお残り続けている。言葉として出来事にするによって現在部分が忘れられてしまう。

自分は学芸員さんの話を聞き「核」という巨大な主語に注目した、核という言葉は放射能、エネルギー、化学兵器そして差別や多様な要素を生み出す、こうした多数の意味を持つ言葉は話し合いの場などで効率化されていくが、一つ一つの小さいものごとが抽象化されていきそれに対し「仕方がない」や「リターンの」などと無碍にされてしまう。

この抽象化されていくプロセスが福島でも起きているのではないかと、被害は数値化されていきその数値に政府は管理可能な問題としていき、そこにいる人々の意見などは隔離されていっているのではないかと考え福島スタディツアーに向かった。

最初に訪れた東海原子力発電所では、「比較することによって根本的な問題が抽象化されていく」という構造を強く感じた。火力発電や再生可能エネルギーと対照されることで、原子力発電の効率性や安定供給といった「良さ」が前面に押し出されており、自分自身も知らず知らずのうちにその利点に引き付けられていることに気づいた。

そのときの自分は、あくまで「中央」にいる立場の人間だった。自分の生活がより便利で、より豊かになるかどうかという視点から原子力を見ており、その電力がどこで、誰の負担の上に成り立っているのかという問いは、意識の外に置かれていた。比較という手法は選択を分かりやすくする一方で、事故や被ばく、地域に押し付けられてきたリスクといった根本的な問題を背景へと退けてしまう。原子力発電の是非が「他より優れているか」「合理的か」という枠組みで語られるとき、そこからこぼれ落ちるのは、周囲に置かれてきた人々の生活や声である。その構造自体が、私がこれまで無自覚に受け入れてきた「抽象化」の一例なのだと感じた。そしてそのとき私が抱いたのは、原子力という問題以前に、そうした見方を無自覚に選び取っていた自分自身への失望だった。比較によって納得し、効率や利便性に安心し、気づかぬうちに「自分は関係ない側にいる」と線を引いていた。その線引きをしていたのは、制度でも説明でもなく、ほかならぬ自分自身だった。被害を受けるかもしれない人々の生活を想像する前に、「自分の生活がどうなるか」を基準に考えてしまう。その感覚の軽さ、そしてそれを当たり前のように受け入れていた自分の立ち位置に、自分は強い違和感と恥ずかしさを覚えた。

・ 竈門さんの話の中に、震災後下がっていた電気の需要が今 AI のデータセンターやそれに伴う工場の運営のために増えていて、社会がエネルギーを必要としている。そのための原子力発電である。というようなものがあつた。ここで私が思うのは、そうやって今必要だからと過去も未来も見据えなかった結果が原発事故なのではないかということだ。ものは変わるが原発を減らし代わりに進めてきた太陽光発電。これも現在メガソーラー問題として大規模森林伐採や湿原の埋め立てによる環境破壊や、パネルのゴミ問題などとしておこっている。福島の街も自然も一度なくしてしまったものはそう簡単に還ってこないのに今の豊かさを優先してしまう。あんなにも大きな事故が起こっても方法は違えど同じような構造が生まれている。陽の当たらない影を作り見向きもしない、そして見なければ何も考えず豊かさを追い求められるような。そんな構造を

今でも作り続けてしまっているということ。事前学習の水俣ツアー報告の最後にあった話ともつながった。そう考えると歴史や過去、夢や未来を、丁寧になぞって描いて、今の社会や自分の生活を作ることの重要性を感じた。

・11月24日(月)

2日目は古滝屋旅館をあとにして、檜葉町の宝鏡寺へと向かう。宝鏡寺の伝言館では立命館大学名誉教授の安齋育郎さんが来られているタイミングと重なったため、事務局の丹治杉江さんの進行のもと安齋先生の講演と伝言館、未来館の見学を行った。ここでの安齋先生の講演については「学問研究とは何なのか?」という観点から印象に残った生徒も多かったようだ。原子力発電が日本に導入されてきた歴史について学ぶ。2時間半ほど講演と見学をしたのち、東日本大震災・原子力災害伝承館へ向かう。

昼食後1時間半ほど東日本大震災・原子力災害伝承館をこちらは自由見学という形で行う。色々な展示物を介して、福島第一原子力発電所事故についての概要を学ぶ。その後、2日目最後のプログラム、相馬町のおれたちの伝承館へと移動する。おれたちの伝承館を見学したのち、近くの双葉屋旅館でおれたちの伝承館館長の中筋さんから講演をしていただく。双葉屋旅館は24日と25日の2泊をした。

宝鏡寺(伝言館・未来館)、東日本大震災・原子力災害伝承館、おれたちの伝承館。それぞれ違った展示物や視点、表現方法で福島第一原子力発電所事故について説明をしてある。生徒たちはその比較からも学びを得ていたようだった。

以下生徒のスタディツアー感想から2日目のものを抜粋する。

・宝鏡寺伝言館で安齋さんから東京大学助手時代にアカデミックハラスメントを受けたことや、東京電力に対する訴えの経緯を聞いたとき、自分は「学ぶ」という行為が軽視されているのかを痛感した。憲法上は「教育を受ける権利」が保障されているはずなのに、その学びで得た知識や経験が、当事者が不当な扱いを受けたときに自分を守る力として十分に機能していない現実がある。「学ぶこと」は大切だと学校では言われ続けてきたが、実際には得た学びが構造的な不正義に立ち向かう力として担保されていないのではないかと、そんな疑問が出てきた。

制度や歴史をどれだけ知識として覚えても、それだけでは社会の深層にある構造的な部分揺るがすことはできない。中央と地方の非対称性、国の論理が優先され生活者の声が後回しにされる仕組み、さらに負担が地域側へと押しつけられ続ける構造は、教科書的な理解ではびくともしないほど強固に社会へ組み込まれている。知識として「知る」ことはできても、それを支えている価値観や権力関係、そしてその構造に苦しめられている人たちの部分までは見えてこない。だからこそ、学ぶことを単なるインプットで終わらせず、「そこから何を疑い、どのように変えていこうとするのか」という視点を持つことが不可欠なのだと実感した。

これまでの自分は、知識として理解できたらそれで満足し、どこか安全な場所から社会を眺めていた気がする。しかし今回、被災地に足を運び、地域で実際に起きてきた不平等や葛藤に触れたとき、自分が見えていなかった現実の重さを突きつけられた。頭で理解したつもりになっても、現場の声の切実さ、人々の選択に伴う苦悩、そして国との立場性は、直接その場に行き、目で見て耳で聞かなければ決して実感できないものだった。

そのとき初めて、感じた違和感や怒りを自分の言葉として語り直すことの意味がわかった。単に「知っている」だけでは構造は変わらないが、それを言語化し、他者に伝え、対話を重ねることで、初めて社会の強固な枠組みに小さな裂け目を入れることができるのではないかと思ったのである。社会は一人の力で急激に変わるものではない。しかし、構造を「変えようとする視点」を持ち続けることは、自分自身の生き方を変え、周囲の人との議論の在り方を変え、そして時間はかかっても社会全体の空気や価値観を少しずつ動かしていく力を持っている。

学びとは、教科書の知識を積み重ねる行為ではない。むしろ、既存の枠組みに疑問を投げかけ続け、見過ごされてきた声や経験を可視化し、社会の「当たり前」を問い直すことなのだと思う。知ることを出発点に、そこで生じた違和感を放置せず、それを言葉にし、自分の立場性を丁寧に問い続けるその積み重ねこそが、深く根を張った社会構造に亀裂を入れていく唯一の方法なのではないかと強く感じた。



・たしかに原発で聞いたりその資料を見ると、科学的には安全に見える。反対派が言ってるのは構造的な格差とか、過去に原子力によって被害を受けた人の話だったりする。そりゃ噛み合わないよな、と思う。それを感じたのは、安西さんの話を聞いた後質問で「今の原発に科学的な穴はあるんですか」と言おうとした時。タイミング掴めず聞けなかったけど、安齋さんの話では昔の科学的安全性についての話しかなかったから、今は安全については調べてないのか?と思った。けど安齋さんの言っている「科学的な穴」というのは本来の問題じゃなくて、それを聞き入れなかった原発開発側と、その構造が根本の問題である。それを安齋さんは言ってるんじゃないか。そう考えると、原発で聞いた安全性の話とは少し論点が違う。かまどさんの話を聞いて、安齋さんの話を聞いて、この二人が話してる姿がちっとも想像できなかった。でも本来は互いにこそ説得をするべきだ。安齋さんは原発側に、かまどさんは反原発派の人に議論しに行くのが一番必要なことなのになぜそれをしないんだろう。ふたりとも自分の話を聞きに来た人に話をしているけど、基本的に話を聞きに来る人は同じような考え方の人が多いんじゃないかと思う。

そしてそれは互いを説得することを諦めたからじゃないか、と思う。科学と人道っていう「互いの論点の違い」は原発推進派からすれば「反対派の論点のズレ」だし反対派からすれば「推進派の論点のズレ」にもなる。互いに自分のフィールドが前提だから「話が通じない」ってなってる。安齋さんは、かつて原発を説得してた時に全く聞き入れられなかったという過去があるからそういう言い方になるのかも知れない。

ここで一つ、感想交流のことについて言いたいことがあって、俺が「推進派は科学的で反対派は…」って言ったのは全く持って「反対派は科学のことは見れないバカだ」って意味じゃないんです。少しその後の話の流れがそういうふうに向かっていってしまったのは悔しい。東北と復興メンバーの中にも原発は必要って考えの人がいて、その人の感想で俺の言葉から

つなげて「原発派は現在、反対派は過去の話をしてる」と言っていた。そうするとまるで反原発は冷静に話ができないバカみたいじゃないか、と思った。けどよく考えてみると俺も本心では「互いの論点が違う」ことを「反原発派の論点がズレている」って思っていた事に気づいた。そうするとどうして俺は原発に反対なのかって根拠がわからなくなる。どうしても俺の頭の中には「科学は正しい」というのがあって、それが科学と関係ない人道的な話やそんな話をする人を見下しバカにする原因になってるんだと思う。確かに東海や廃炉資料館で風評被害について職員さんに話を聞いたとき、勝手にニュアンスだけど彼らの話し方には「科学的に説明してるのに納得してくれない」「話が通じない人」って感じの言葉遣いがあった。

原発派も、反原発派も、互いの説得をやめて中立の人たちの票集めはしっかりしてる、って印象を持った。伝言館にあった「エネルギー・アレルギー」のポスターとか、婦人の甲子園の話とか、それは反対派を説得するための言葉じゃなく、原発に対して意見を持ってない人を引き入れたり、味方の士気を上げるための言葉だった。それは小さい頃に見た反原発の集会でのパンフレットもそうで「東電側にこんな不祥事がありました」とか「東電は話が通じません」とか、意見を持ってないひとに自分の無害と相手の害を訴えかける言葉。(中略) 原発派には科学を前提に「安全」があって、反原発派には社会の仕組みを前提に「危険」がある。でもそれぞれの意見の背景は知らないままに俺達は「原子力は安全です」「危険です」のアピール合戦を見せられるだけでしか無い。それではいつまでも、原発の必要性について話して決める機会はやってこないと思う。それでも自分が知ったこと学んだことを元に考えを持っていなければ、どちらかにただ便乗するだけになってしまう。・福島に行く前にアーティゾン美術館にいった。私自身芸術作品には疎くよくわからないで終わることが多い。そんな中、おれ伝の見学や中筋さんの話で考えたことは、表現についてだ。私は結局、東北と復興の学びは自分に返ってくると思っている。自分が何をしなければいけないのかどうあればいいのか、どうありたいのか、自分の今後を考えるときの一つの視点にする。そうした時、おれ伝の作品や中筋さんの生き方というのは、その人それぞれが自分はどうありたいのかということの表現をしているということなのだと思う。表現というと絵や写真、言葉といった相手に伝える手段をうまく使える人の特権のように思えてしまうし、絶対にそっちの方が人の目に留まり、思考が生まれる機会が多い。けれど私もこんな理由があるから自分はどうありたい、ここはこだわっている、というものを自分の生活や自分自身の言動によって表現できるのだと思う。表現することの意義は自分の周りに影響を及ぼせる可能性があるということだ。知っている人が少ないことに対して自分は何かできるかということは毎度考えるが、自分にできることなんて良くも悪くも自分なりに表現することぐらいなんだろう。これはこのツアーでの新たな気づきの一つだった。

11月25日(火)

この日は朝から東京電力の廃炉資料館を訪れて説明を受けた。東京電力の廃炉資料館ではあるが、説明をしてくださったのは東京電力から業務委託を受けている廃炉資料館の方からであった。前日が、地元の方、行政、芸術の分野からの説明であったのに対して、廃炉資料館は企業からの説明であり、その点でも生徒たちにとっては刺激を受けた様子だった。その後道の駅なみえで昼食を済ませると、双葉屋旅館に戻り、双葉屋旅館女将の小林さん、そしてこころのケアセンターなごみの米倉さんからお話を伺った。ここで蟻塚医師の講演もお願いする予定であったが、今回は体調不良ということで講演はキャンセルになった。その分米倉さんからワークショップも交えてじっくりと講演していただき、心のケアについても考える時間となった。

この日の夜に双葉屋旅館女将の小林さんから、ウクライナの子どもたちにクリスマスメッセージカードを作ってほしいと、高校生たちはお願いされた。ウクライナからのメッセージを受け取り、返事を書くような形だ。応答するというのを大事にしている講座であったが、自然な形でウクライナに応答する形となった。ある生徒は苦笑いしながら「この手紙を受け取っちゃったら、ウクライナの戦争を見て見ぬふりできなくなるよ」と言っていた。知った責任、かかわった責任。応答責任を果たすというと重く感じるが、しかしメッセージカードを作るみんなは明るい表情で楽しそうにかいていた。ここから少しでもウクライナのことにも目を向けるようになるかもしれない。

以下スタディツアーの生徒の感想から、3日目の感想を抜粋する。

・原発事故により避難指示が出された 30 キロ圏内には当時自力では避難が難しいような要支援者が 10 万人はいたと言います。その中には寝たきりで移動するのが極めて困難な方もいるのにも関わらず避難せざるを得ない。

職員の方々は自分の命を守るために避難していて支援者を介助してくれる人が不在のまま避難所へ連れていかれる。そして適切なケアを受けられるはずもなくそのまま亡くなってしまふ。

本来であれば地震や津波の被害さえ乗り越えられれば助かることがとても多かったのにも関わらず、そこに原発事故という状況が重なってしまった結果助からなくなってしまふ。そんな方がとても多かったという話を聞いた時は本当に言葉に出来ないような感情が頭を埋めつくしました。

・復興が「お金をかけること」や「目に見える成果」だけで測られてしまうと、人の感情や生活のリズムは後回しにされがちだと感じます。心のケアセンターなごみの米倉さんの話から、支援には段階があり、まず信頼関係を築くことが欠かせないということを学びました。SOS を出せる人は支援につながる可能性があります、出せない人、ためらう人ほど深刻な状況に陥りやすい現実があります。避難所の環境や仕事、役割を失ったことによるストレスは、数値では測れませんが、確実に人の生きる意欲を奪っていくと感じました。こうした部分に目を向けない復興は、形だけ整っても人を救えないのではないかと考えます。

・三つ目の実行することの意味は、双葉屋旅館でクリスマスカードを書いた時間から感じた。書く前はモヤモヤを感じていたはずなのに、書き終えた後にはそれが収まっていた。その理由を考えると、ウクライナの子どもの自分と同じ存在として捉えられたこと、そして小さくても「実行できた」という実感を持たせたことが大きかったのだと思う。これまで石巻や福島の人々を個人として見ようとはしていたものの、「被災者」「被爆者」といった枠やフィルターを完全には外せていなかった。そのため、「分からないことがある」という前提で話を聞き、考えていた。しかしクリスマスカードを書いているときは、「どうしたら喜んでくれるだろう」「自分だったら開けたときに嬉しいだろうか」と、純粋に相手のことを考えていた。等身大という言葉が適切かは分からないが、相手を自分と同じ大きさの存在として考えられていたと思う。また、カードという形でも「実行できた」こと自体も大きかった。石巻でも福島でも、知れば知るほど何もできないという無力感を強く感じ、学ぶ意味すら見いだせなくなることがあった。しかし、たとえ自己満足であっても、何か一つ形にできたことで、「自分にもできることがある」と思えた。その感覚は、自分自身への慰めになったのだと思う。



11月26日(水)

最終日は大熊町立学び舎ゆめの森学園にうかがった。地域の方との芋煮会のイベント日であったが、その前に学園長であり、本学園の卒業生でもある南郷さんからお話を伺う。「復興」と「教育」の一つの形を生徒たちは聴き、見学してこの4日間の学びを締めくくった。学び舎ゆめの森学園での見学を終えたのち、ほっと大熊で昼食をとって、帰埼玉した。こうした3泊4日間の福島県浜通りスタディツアーは終了した。子ども達はこの4日間、様々な立場の人たちから福島第一原子力発電所事故やその後の「復興」について伺った。

スタディツアーの生徒の感想から、最終日を含めてスタディツアー全体にかかわる感想を抜粋する。

・ゆめの森では、新しく綺麗な設備が整っていたりと、先進的な学校だと思いました。しかし同時に世間からは復興の成功例に見えてしまうのではないかと思います。確かに、「未来型の学校」「新しい教育」などメディアにも取り上げられて、震災はあったけど、結果的に良い学校ができました。しかし、そもそも論が抜け落ちています。なぜ、こんなにも新しい学校が必要だったのか。なぜ統合されたのか。など「なぜ」を消すと「綺麗な学校ができた」「子供たちは元気に学んでいる」「復興は進んでいる」という文面を社会が目にとると「元の学校」「地域の繋がり」「それまでの日常」などが語られなくなってしまいます。これは、復興ではなく上書きしてしまっているなどと思いました。語り手の話を領有せず、そのままの言葉を後世に語り継ぐことが大切だと思いました。



・街って存在自身が抱える問題と街があるからこそコミュニケーションの輪が生まれるという事実。その矛盾が震災を通して浮かび上がる。街に若者が移住するのはもちろんいいことだけど、大熊の街は「真っ白のキャンパス」ではないのだ。シャッターだらけの商店街をまた活気づかせることが町おこしじゃないか、と思った。

かつての住人にとってふるさとの「大熊のまち」があるように、これからゆめの森で育った子のふるさととは今の「大熊のまち」になるって思うと、それもまたいいのかな、昔にこだわりすぎるのも違うのかなとも思ってしまう。けど、「大熊じゃなくてもいいこと」を大熊でやるのは、町おこしって言えるんだろうか。それは原発を誘致しているのと一緒で、結局ゆめの森を卒業したら大熊を離れてしまうかもしれないじゃあ勿体無いんじゃないかと思う。キャンパスに新しい色が塗られ、商店街がなくなってると、いったいどこまでが大熊なんだろう、となる。

ゆめの森の周りの住宅街を見て、このまちで庄司さんやMさんは生きていけるのだろうか。実際見てもいない子供たちとも庄司さん達とも会ったことのない俺が言うのも無責任だけど、ある意味で庄司さん達はいきなりあの街から置いていかれてしまう。過去として上からラッピングされてしまう。

なんで復興を美しく「終わらせたがる」んだろうか。中筋さんは復興とか震災をアートで美味しそうに包んでしまう、と言った。おれ伝には、花は咲くに対する詩もあった。震災と復興には終わりが無い、けどやっぱり包まれてしまうのはそれが行政の仕事になってしまっているからだと思う。復興というのは本来行政がメインではないはずだ、その場所に住んでいる人、その周りに住んでいる人が当事者なのに、現代では被害が金に置き換えられるがゆえに、責任を持つのが国や行政ということになる。役人の仕事ってどうしても数字にしなきゃいけないから、数字のある「復興」にはどうしても終わりがなければならぬ。それは関東大震災の時も同じで、数字や被害的な終わりが「災害の終わり・復興の同じ」と同じカウントになってしまう。復興は行政の仕事ってだけじゃないことをおれじしんがわかっとなきゃダメだな。と思った。

・今回福島へ行って、話をしてくれた方々と、行政や東京電力側の話のかみ合わない風景を見て、なんでお互いの視点で、話していけないのだろうと思った。反対している人はこんな事件があったんだからもう信用できない。だとか、私たちの故郷を返してくれ、のような感情で訴えているのに対し、東京電力側は東日本大震災を上回る大災害が起こったとしても、大丈夫な設計をしています。だとか、福島第一原発の二の舞にはなりませんそのためにこういう装置を付けて、何度もシミュレーションをして、と非感情的な、倫理的な話をする。これは合理的に、正解を見つけようとする人たちには、ふくしまの人たちは

感情的になりすぎている。もう原発は安全なのだから気にしなくても良いのではないか。それよりもエネルギー不足の今、原発を動かさずにどうするんだ。と、東京電力側の主張が正しいと、認められるべきだと考えることもあるだろう。

でもそうじゃなくて、ふくしまの人たちはそれを全部分かったうえで、こんな社会をあなたは許容しますか？このまま進めていきますか？と問われているように感じた。現代人らしく損得で考えるなら、若者の流失が止まらない田舎に原発ができて、地域の中での雇用が生まれ、人口が増える。中央の人たちは電気が安くなってうれしい。企業もお金儲けができてうれしい。政治家も脱炭素社会を目指していたからかなう一歩手前まで来れてうれしい。みんな幸せ。でも震災が起きて住めなくなってしまった。けど、街が戻って、もっと最新型の公共施設が増えて、家も新しく立てて、そのお金も国から出て、一安心。企業は復興のために地域の人たちと手を組んで、今度はロボット開発。みんな得を得ているじゃないか。と思えたならきっとこんなに考えてないよなあ。絶対に誰か透明化された見えない人が抑圧を受けていて、でも声を上げられなくて、かき消されていく。それってどうなんだろう。良い社会なのかな。というかそもそも人口流出が止まらない場所に外からの人たちが栄えさせることは良いことなのかな。原発の次はロボット開発って国の利益になるからって負担を背負わせることは良いことなのかな。国民全員から集めたお金を人の少ない地域に最新の公共施設を立てることに使うのは良いことなのかな。とか。

そういう社会にとってのいいことだとかより良い社会ってどんなものなんだろうと考えた。例えば木村さんの講演にあったように原始的な生活に戻る。そんな馬鹿などと思う気持ちもあるけれど、それは人口流出を止めるだとか中央と周辺の関係とかそういうものをかなぐり捨てることができる。それも良い社会かもしれない。でもいまさら文明を捨てられる人は少ないだろう。もっと身近な、できそうなものでいえば原発を稼働させない社会とか？抽象的にいうなら誰も抑圧されることのない社会？自分が何を指したくて、何をしたらいいんだろう。

帰ってから考えて、考えて、もう行き詰ったなあと思った時に気分転換もかねて、本を読んだ。その本は、トラウマインフォームドケアについて書いてあった。それは、トラウマを根本的に治療することではなくて、社会がトラウマについて正しく理解していて、トラウマなのかな？と思えるような、声を上げやすい社会を目指すもので、なんだか自分が作りたい社会の基盤ってこういうものなのかなあと漠然と思った。誰かが透明化することなく、抑圧されず、声が届くような物にできたなら。環状島理論で言う水位が下がって、みんなが島へ登れるような。すっごく難しいし、自分が何をしたらそんな社会になるのかわからない。それがたとえば社会主義とか資本主義みたいな分かりやすい物ならわかりやすい形にできるけれど、なかなか形にならない。

スタディツアーが終わってから12月には小グループに分かれて「復興とは？」ということをあらためて考えた。年が明けて1月には、改めて「復興を目指す社会を考える」ことも行った。昨年度から福島県浜通りスタディツアーを実施するようになって、より「復興」について多角的に考えられるようになったと思う。しかし目指していくのは、「復興」を分析したり、評価したり、安易にこれが「復興」だというゴールを設定するということではなく、「復興」を問い直して、「わたし」たちの社会を問い直して、そして「わたし」自身に問いかけて、より学びや考えを深めていくことであると私は思っている。高校生たちにとって何をこれから学びたいか、どのように行動したいか、どのような社会をめざしていくかの主体の一員として考え始めるきっかけになって欲しいと願っている。